

随 想

良い英文を書くために
——好きこそ物の上手なれ——

松 島 巖*

はるかなる声に目ざめて

昭和 27 年暮のある夜、ところは京都府。クラシックなラジオに耳を押しつけるようにして、当時高校一年生だった私は、600 km かなたの東京からはげしいフェーディングを伴ってはるばる届く大学受験講座を聴いていた。野原三郎先生（当時明大）の英文法である。京都の冬は寒く、15 才の身はねむいが、この放送はこんなにしてまで聴く価値があつた。関西ではまだ、同じプログラムがなかつたのである。

「たいていの他動詞は動名詞、不定詞を共に目的語にできます。しかし、avoid は不定詞をとりません。“You should avoid hurting a stranger's feelings” はよいのですが、avoid to hurt は誤りです。そのような動詞には、ほかに enjoy, escape, finish, help, give up, mind, remember などがあります。頭をとつて meghafer と憶えればよいでしょう。」

この放送は今も忘れはしない。そんなことは参考書に書いてあるのだろうが、私には大変な発見だった。英語は形どおりには行かない、やつかいなものであることを知つたのである。

中学時代、よい英語の先生に恵まれたから、卒業の頃には、英語なんてやさしいものだとかをくくつていた。基本的文法をしつかりやつて、あとは単語と熟語をたくさん憶えれば万能であると思つていた。ところがこの放送をきっかけに、英語は一語一語、生きた形でマスターしておかないと正しく使える保証はないのだと悟つたのである。何しろ言語なのである。英米人は英語によつて複雑な思想を伝え、恋をささやく手段にする。公式どおりで十分なはずがない。

こんな当然のことをながながと書いたのも、類推によつて別の単語を同じに使うことによる誤りが多いからだ。代表的なのは、I gave him a book から類推して、I explained him the meaning (誤) としてしまう例である。I explained the meaning to him でなくてはならない。

inform になるとまたちがう。外国への手紙に、We informed the fact to the members とやりがちだが、We informed the members of the fact でなくてはならない。ところが notify なら、notify somebody of something でも、notify something to somebody で

もよいというのだからやつかいである。

“These results support that corrosion is controlled by diffusion of oxygen” は正しいだろうか。これは誤りである。support のあとにその対象となる名詞が来なくてはいけないから、たとえば、support the idea that~ としなければならない。この誤りは support を suggest と同じに扱つたことから来ている。suggest ならば、suggest that~ でよいからだ。

正しい英文を書くには、一語一語の正しい用法をマスターしつつ、積み上げて行くよりほかに方法がないようである。

添削例を手本として

自分の英文を外人専門家に 見てもらつたときでないと、なかなか自分が犯しやすい誤りや、誤りでないまでもおかしいところがわからない。私はそのような機会を大切にしている。

訂正されても、その理由がわからないことが多い。いくら聞いても、そのほうが普通だからというばかりである。一百円ではなく百円で、万円ではなく一万円である理由がないのと同じなのだろう。

あるとき、「ずっと以前から」というのに “Since long time ago” と書いて大笑いされたことがある。理由はなにかともかくおかしいというのである。口惜しいことにこれは「誤りやすい英語」のたぐいの本によく出ている例らしい。ある本によると、ago が過去の一点を指して現時点から過去にさかのぼる副詞であるのに対し、since は過去の一点に端を発して現在までの時間の継続を指すのだから、二つを結びつけるとおかしいのだそうだ。

緒言などに「最近～」という書き出しで研究の動機を書く場合がよくあるが、動詞の現在形と併用しては誤りで、現在完了や過去形を用いるのだという。“Recently, the prime motive for research in corrosion is provided by the economic factors” (誤) などと言ひそうだ。Recently でなくて Currently なら正しいのだが。

さきごろ NACE (National Association of Corrosion Engineers) に投稿した報文に、理由を示す since をたて続けに 2 箇所 because に直された。“.....such an estimation is important since too high a current density may cause hydrogen cracking of high-strength steels or.....” と “However, it is likely

* 日本鋼管(株)技術研究所

that the theory provided by Tomashov explains part of the mechanism of the present case, since the current is at least partially controlled by hydrogen ion diffusion”である。

because についての私の知識は, because は直接の理由を示すもので, “It will rain, because the barometer is falling” のように推定の説明に用いてはいけないということくらいである。なるほど晴雨計の具合が原因で雨が降るわけもない。since も理由を示すが, because はど強くないというから, 気軽に使ったのである。

いろいろ本を調べてやつと見つけたのは, 佐々木高政「英文構成法」(昭和 29 年, 金子書房)——中年の諸氏にはなつかしい本だと思うが——の説明で, 「since も because の意味で理由を示す場合に用い, 普通, 主文の前に置く」とある。さきの文では主文のうしろにあるのがいけないのだろうか。

H. H. UHLIG といえば腐食の大権威であるが, その著書に “Corrosion and Corrosion Control” という教科書がある。私は若いころ, MIT で Prof. UHLIG に師事した関係もあつてこの本を翻訳したが, その後改訂版が出たので, 日本語版も改訂した。ほぼ同じ記述でもところどころかわつているので見比べるのに手を焼いて, 旧版をテープに吹き込んで新版と比べたのだが, 英文に関して興味あるちがいに気がついた。

たとえば, “~corrosion of amphoteric metals, e. g., Al, Zn, Pb or Sn. These are metals which corrode rapidly on exposure to either acids or alkalies”, “The corrosion scientist~recommends heat treatment and~ of alloys which improve their performance” の which がそれぞれ that と that will にかわつているのである。

関係代名詞の that と which はたいてい互換性があり, 私もそのときの気分やひびきで適当に使っていたが, わざわざ直したのだから, やはり微妙なちがいがあるのだろう。ある本によれば(松本安弘ら「あなたの英語診断辞典」昭和 51 年 北星堂書店), 限定的用法, たとえば, “The house that my father built has been destroyed by fire” のように that 以下が無いと意味をなさないときは that を which に置きかえてはいけないのに対し, which は “The big white house on the hill, which you may have noticed, was built by my father” のように追加的に情報を述べる非限定的用法に用いるという学説があるのだそう。前述の教科書の例では, どちらも限定的用法だから that にかえたのではないかと思われる。

私が地熱発電用の熱水井に用いられる鋼管の腐食について, “The cause of this type of failure has been attributed to erosion-corrosion that initiated at the joint of the casing~” と書いたら, that を which にかえた外人がいた。that では限定的すぎてしつくりしな

いのであろうか。

前述の since について, UHLIG の教科書の旧版に “In view of the fact that the emf of a cell is always the algebraic sum of two electrode potentials~” とあつたのが, 新版では “Since the emf of the cell~” となつている。この例は文は簡潔にという教訓でもあるようだ。日本人の英文は冗長だといわれる。「上と同様の説明は, 他の金属の場合にも適用できる」という日本語をそのまま, “The same explanation may be given as above in the case of other metals” などとせず, “The same explanation applies to other metals” とするとすつきりする。

なお, 例の教科書の最初の 50 ページに since は 16 回でてくるが, 11 回は文頭にあつた。しかし, あとの 5 回は主文のあとにある。だから必ず先頭になくてもよいらしいが, 可能なかぎり主文の前に置く方が安全なようだ。と勝手に決めているのだが。

人の誤りをきめつけるのは難しい

英文の添削を頼まれたとき, 明白な文法上の誤り——たとえば, 三人称現在単数の動詞の s の脱落——を正したり, 一般的でない用語を直したりするのは容易であるが, どうかと思つても, 本当に正しくないのかどうかわからないことが多い。私がよくないと思つても, 英米人にはどちらでも同じかもしれないからである。だから添削を頼まれても, 「私流に直してしまいますよ。少なくとも改悪はしないつもりですから」と言うことにしている。

due to という表現は何となく英語らしくて, 日本人は多用する傾向がある。文法の本では, due to は「~による」という叙述的な形容詞であり, 「~のために」と副詞的に使つては誤りであるとして (a) We were late due to the car accident は誤り, (b) Our lateness was due to the car accident は正と例示している。日本人は (a) のような文章を好むから, ここに due to を用いる誤りが多いという。due to のかわりに because of, on account of, as the result of を使えばよいのだが——英米人の文にはこの三語は実に多いが日本人の文には少ない——私もうつかり due to を使つてしまう。

ところが英米人の用法の調査結果によると, due to の 35% は (a) の用法であつて, (b) の方が正用法なのだが, (a) も非難できないのだそう (安藤貞雄「現代英語の慣用と語法」文建書房 昭和 42 年)。先日外国雑誌に投稿した論文で, “The specimen showed moderate corrosion presumably due to incidental exposure to the solution” と書いたが, 訂正されなかつた。

同様に, 典型的な誤りとされる “The reason is because~” もかなり使われ, 話し言葉では, “The reason is that~” よりむしろ多いという (安藤, 前出)。

言語は, 世に受け入れられ普及すれば正しいと言わざ

るを得ない。したがって、正用法は時代と共に変わるし、同時代でも人によつてちがう。小学校のとき「わうさまがにはで、てふてふがあふひのきにとまるのを、みてみました」と書くのに苦労したものだが、今では「おうさまがにわで、ちようちようがあおいの～」と書かなければ誤りだろう。入水（じゅすい）もすたれてにゆうすいになった。現在、重複はちようふくでもじゆうふくでもよいが完遂をかんついと読むのは誤りとされている。しかし、かんついという人は、むしろ多いくらいだ。

だから、人の書いた英文を自分の流儀とちがうといつて非難できない。しかし、外国語では真の言語のひびきは理解できないから、正用法に徹するのに若くはない。文章でも話し言葉でも、正用法でないものはしばしば魅力的で使いたくなる一方、品位がないと見なされることも多い。正用法でないものを位置づけを知つたうえで使うのは、その人の勝手である。知らずに使うのは不勉強であり、危険でもある。

複雑な複数

C形の試験片（複数）をそれぞれ一本のボルトを使つて締めつけて、応力腐食割れ試験を行つたとする。これを記述するのに、“The C-rings were stressed by the tightening of (bolt)” のかつこ内は a bolt か bolts か。感じとしては a bolt としたい。しかし、中学校では “We are students” と習つたから、bolts ではないかと本能的に考える。

少し勉強しようというので、大修館の Question-Box Series の名詞、代名詞編を調べたら、少しわかつたような気になった。例文に “Jack told me just now that Europeans hold their fork in the left hand while they eat” があり、fork や hand は単数であつても、欧州人が左手を一本共有して、共有する一本のフォークで食事するなどとは誰も誤解しないからよいのだそうである。複数であつても、欧州人の 1 人 1 人が何本も左手をもつていて……という誤解もないわけだ。

We are a student は無理だが、We take off our hat でよいとも書かれている。

さきの bolt の場合、応力腐食割れ試験を知っている人になら、a boltの方がわかりやすそうである。図の一つも示してあれば、もう文法は気にしなくてもよい。しかしこれらの表現では、厳密な表現はできない。ある英米人の論文に “The specimens were separated from each other by thin spacers” とあつたが、2 個の試験片の間に何個のスペーサを用いたのかは所詮わからない。はつきりさせたければ、“Each C-ring was~a bolt” とでもせざるを得ない。他方、“The specimens had a 3 mm gauge diameter” なら誤解の余地はない。

information を複数形にしないことは、どの本にも書いてある。uncountable noun と言うのだそうだ。類似のものに、advice, news, baggage などがあるが、幸い

技術論文に使うことはまずない。学校では抽象名詞に s をつけるなど習つたが、result, study, experiment, current, difference, length, theoryなどを複数形で使えることは、文献でよく見るから慣れてしまつた。しかし、慣れてない単語では考えてもわからない。一つ一つ憶える以外に方法はない。

物の本によると、goldにはsはつかず、diamondにはつけるとある。言われてみると何となくわからないでもない。しかし、同じ宝石でも、diamond, ruby, sapphireはcountableで、jade(ひすい)はそうでないというから、日本人の感覚のらち外である。

watersが可能なのは我々腐食屋は先刻知つている。“Corrosion and Its Prevention in Waters”という本があるからだ。念のために UHLIG 博士の教科書を見ると、“Natural fresh waters contain dissolved Ca and Mg in varying concentrations”という文がある。もつとも岩崎健弥氏が指摘されるように（「新らしい冠詞の見方と使い方」研究社 昭和 39 年）、単数、複数、無冠詞の用法は複雑だから、一つの文例から一つの形を結論することは危険である。同書の例文に、these offering of affection, the object of his affections—C. Dickens: David Copperfieldとある。同一人が同一個所でこのように使い分けているのだ。

技術論文で affection や love の複数で悩むことはない。しかし、一論文の考察は discussion、みんなでわあわあやると discussions であるのはよいとして、一人で書いても conclusions なのだから困るのである。

人のふり見てわがふり直せ

人の英文をとやかく言う資格はないが、あまり慣れていない日本人の英文には、show, increase, decrease, determine, carry out, various, different, important, clear, effect, obtain, value, about, same など、特定の単語が満ちあふれていると感じる。もちろんこれらはよく使われる単語として当然だが、これらで何とか意味が通じる場合、すべてこれらを使うようだ。「図(表)～に結果を示す」がすべて show ではいささか気になる。英米人の文では、show 以外に、give, indicate, list, illustrate, summarize などがうまく使い分けられている。change も時によつて vary, alter, shift などとなつて

いる。一般に英語は同じ単語の繰り返しを嫌うようだ。単に単語を変えるだけでなく、自然に変わるような構成になつている。UHLIG 博士の本で拾えば、“The corrosion scientist develops better criteria of cathodic protection, outlines the molecular structure of~, synthesizes corrosion-resistant alloys, and recommends heat treatment~of alloys~” のような書き方である。日本語だとすべて「行う」を頭に置いて書いてしまう。

ただし、この使い分けが曲者で、美しさのために変化

を与える場合と、単語の意味から当然使い分ける場合がある。日本語の「ふつうの」に対応する英語には、usual, normal, ordinary, general, common, regular などいろいろあるが、使い分けを要する。普通以上の能力なら more than average となろう。「十分」も adequate, sufficient, enough, ample などがあり、十分なのが質なのか量なのかでちがう。

論文では通常、I や we を避けるため受身表現が多くなるが、日本人の英文には変な受身が見うけられる。consist of, exist, remain, react など自動詞だから受身形は論外であるが、他動詞で文法的にはどちらでもよい場合、しばしば変な受身形がある。たとえば、"Steel corrodes at a relatively uniform rate in seawater" とするところを steel is corroded とする。こういう人はおそらく日本語でも「鋼は海水中で腐食される」というのだろう。もちろん文法的にはよいのかもしれないが、感心しない。しかし、"Piston rings and cylinder walls are corroded by combustion gases and condensates" なら受身であるべきだ。

form にもその傾向がある。A passive film that forms over the surface は that is formed としそうである。increase, decrease, dissolve にも不必要に受身形が見られる。これらは、I was surprised at the news という学校教育の影響だろうか。もちろん surprise には他動詞しかない。drown には自他両方あり、"The boy drowned" でも "The boy was drowned" でも可能で、ニュアンスに差があるらしいが、corrode も form も同じケースなのだろう。

マイ・ウェイ

日頃、英米人の書いた論文で、気に入った表現を見つけたとうれしくなつて割合よく憶えているのは別として、苦勞して翻訳した UHLIG 博士の教科書をひまがあと眺めて、バイブルにしている。

英語らしい文章というのは、一つのリズムのよさである。日本人の英文は冗長だとよく言われるが、これもリズムの悪さに起因していよう。よい英語論文の書き方の本にある例は、例示されている文の範囲で私の言う一つ一つの一つになりうるが、そんなことをいちいち考えていたのでは、肝腎の論文の内容がおろそかになる。だから、英文は気の向くままに書くためのリズムを養うのがよいと思つている。そのためには、一定の英文を繰り返して読むのがよさそうだ。暗記するくらい読めば、上達するにちがいない。英米人にも文章の上手、下手はあるが、UHLIG 博士の文がかりに模範的でないとしても、同じように書ければ（そうなるはずもないが）本望である。

時間ができたら、訳本を英文に戻して、原著と比べて見たいと思つている。また、同志を募つて、当番がよい英文の論文を日本語に意識したものを準備し、参加者が

英文に戻す会を作りたいとも思っている。

いざ英語論文を書くときには、似たような分野の英語論文を読んで、リズムを呼びさますと共に、自分から遠ざかっている表現や単語を working vocabulary となるよう活性を与える。すでに日本語論文があるときでも、なるべく見ないようにして英文を作る。日本語に引きずられると決してよい英文は書けないと信ずるからだ。ましてや直訳すると、絶対にリズムは悪い。

完成した英文は文法をチェックし、同時に冠詞を検討する。文法的に要求される冠詞は当然それに従うが（斉藤秀三郎原著、松田福松訳編「冠詞用法詳細」吾妻書房昭和 28 年、でマスターできる）、それ以外はリズムとフィーリングで決める。だから日によつて the を入れたりと取つたりすることになる。

本屋で気に入った英文や英会話の本は、直ちに買うことにしている。一度買いそびれると意外に見つからない。お陰で私の本棚にはそのような本があふれている。もつとも読んだとは限らない。

翻訳業に出して英語にした論文のチェックは、絶対に引き受けない。これを直すくらいなら、書き直したほうがましである。だいたい、分野のちがう人が原文の心を翻出できるはずがない。インタビューしながら訳せばある程度可能だろうが、時間がかかつて商売にならないか、ひどく高いものになるだろう。

私の英文もたいしたことはない。しかし、努力もせず、ただ横文字になればよいと考えている人の英文よりは、ましだと思いたい。たとえましでなくても、少なくとも自分の意志をせい一杯表現しようとした自分の文章である。

好きこそ物の上手なれ

専門家でもなく、大した経験もないくせに、生意気なことをくどくど書いてしまった。とりあげた内容は、私の悩みや興味を原点にしているから、読む人にとっては当たり前かもしれないし、もつと他のことが問題かもしれない。また、書いたことが全部正しいという自信もない。

言いたいことは一つである。英語は生きた言語である。文法は一つの手段であるが、その基本だけでよい英文をマスターすることはとてもできない。いかにしてよい英文に近づくかは、一つ一つの積み上げによるほかはない。読むにつけ直されるにつけ、それを一つ一つ身につけて、一歩ずつ進歩しうるものである。これには根気も記憶力も必要である。

このようなことは、一時的な勉強や意志だけでは続くものではない。平素の興味が不可欠である。水泳や自転車とはちがうのである。好きであることは、根気と記憶を容易にする。英語の嫌いな人に上手な人はいない。やはり「好きこそ物の上手なれ」である。たとえ、これが十分条件ではないとしても。